

東北 VALUE SIGHT 秋田



小玉醸造株式会社 代表取締役社長
小玉 真一郎 (こだま・しんいちろう)

1955年、秋田県秋田市生まれ。東京工業大学工学部卒業後、North Carolina State University大学院留学。東京工業大学大学院修士課程修了。国税庁醸造試験所研修員を経て、1982年小玉合名会社（現・小玉醸造株式会社）入社。取締役、常務取締役、専務取締役を経て、1997年より代表取締役社長。現在、秋田信用金庫理事、秋田県酒造組合会長、秋田県酒造協同組合理事長、日本酒造組合中央会評議員、同東北支部理事を務める。
小玉醸造株式会社
〒018-1504 秋田県潟上市飯田川飯塚塚飯塚34-1
TEL 018-877-2100・FAX 018-877-2104
<http://www.kodamajozo.co.jp/>

秋田県潟上市に、昨年、地元の醸造会社が所有する古い酒蔵を改装した写真ギャラリーがオープンした。古い梁や柱と、潟上市出身の写真家が撮影した水中写真が見事に調和しており、訪れる人を楽しませている。館長である小玉醸造株式会社の小玉社長は、ギャラリーを通じ、文化で地域を活性化していこうと意欲的に取り組んでいる。

田園に文化の 風を吹かせたい 中村征夫写真ギャラリー「ブルーホール」

八郎潟の南東、潟上市

中村征夫写真ギャラリー「ブルーホール」は、秋田県の中央部に位置する八郎潟の南東、潟上市飯田川にある。潟上市は2005年に旧天王町、旧昭和町、旧飯田川町の3町が合併して誕生した。人口は約35,000人。主たる産業は稲作を中心とした農業のほか、この地域の特産であるつくだ煮に使われる魚を採る漁業、また花き栽培も進められている。

この地域は八郎潟の西側にある男鹿半島という観光地を有する。しかし、男鹿半島観光に訪れる観光客は潟上市を素通りし、八郎潟の干拓地を見て、男鹿半島に入るのが通例であった。特に観光資源がなかった潟上市は、旧町時代に天王地区に展望タワーを有する観光施設「天王グリーンランド」を、また昭和地区に花き種苗センターを核にしてレストランを備えた道の駅「ブルーメッセあきた」を建設し、潟上市への誘客を図ってきた。



大正11年建築の日本酒貯蔵庫が改装され、「ブルーホール」として生まれ変わった

醸造業を生業にして

当社は明治12年（1879年）に現在の潟上市飯田川で創業した。地域の原料を使い、味噌・醤油を醸造し、大正2年（1913年）に清酒「太平山」の製造を開始した。田園地帯の真ん中に位置し、ふんだんに原料を確保することができる恵まれた環境の中で日本古来の伝統的醱酵食品（酒）を造り続けてきた。創業者小玉久米之助の長男小玉友吉時代にはその意欲的な事業発展努力が実り、醸造数量が伸長し、味噌醤油蔵の拡充、酒蔵の建て増しが行われた。その醸造蔵は今でも現役の蔵として使われている。小玉友吉は大倉財閥の統帥である大倉喜八郎に私淑し、「事業を発展させるためには建物を建てなければならない」という言葉を金科玉条としていた。そのため敷地内に次から次へと醸造蔵を建てていったのである。

中村征夫氏との出会いからブルーホールへ

小玉友吉が大正11年（1922年）に建てた酒蔵を改装して出来たのが中村征夫写真ギャラリー「ブルーホール」である。

中村征夫氏は昭和20年（1945年）に現在の潟上市昭和に生まれた。水中写真の分野では日本の第一人者と呼ばれている。昭和63年（1988年）に木村伊兵衛写真賞、平成19年（2007年）土門拳賞を受賞し、秋田県文化功労者、潟上市名誉市民に選ばれている。市役所職員から「中村征夫氏の写真が潟上市の小学校に飾られているが、一般の市民が自由に学校に

入って鑑賞することができない、何とか常に一般のお客さまに中村征夫氏の写真を見せてあげることのできる施設ができないだろうか」という話を伺った。そのとき当社の敷地内にある古い酒蔵で、現在利用率が低い建物の活用を思いついたのであった。

ギャラリーの計画を具体化するために、中村征夫氏に初めて会ったのは平成20年（2008年）春。中村征夫氏も故郷に常設ギャラリーを作ることに大いに意欲を示し、一緒に進めることに決定した。前に記したように、潟上市には誘客のための施設「天王グリーンランド」、「ブルーメッセあきた」がある。しかし、中村征夫氏と私たちが目指したギャラリーの計画はもっと文化の香り豊かなものである。県都秋田市から20km離れたところに写真芸術の中心があるというのは、誇らしいものではないだろうか。

2009年11月7日ギャラリーオープン

昨年11月7日土曜日に中村征夫写真ギャラリーはオープンした。古い酒蔵の梁や柱を残しながら、内装は完全に美術館仕様にリノベーションされた中に、中村征夫氏がこのオープンに合わせて撮りおろした新作「レディーエリオット島」の87点が飾られた。「ブルーホール」というギャラリーの名前は公募し、市内からの応募者の佐藤さんのものが採用されオープンの前日に行われた内覧会で発表された。ブルーホールとは、洞窟や鍾乳洞だったところが海中に沈み、海底に穴があいたようになった部分のこと。

中村征夫氏が「地方からあっと驚くような文化の発信をしていきたい」と述べたコメントのとおり、

初回展示の「レディーエリオット島」以降、意欲的な企画展で多くのお客さまの文化的渴望に応えてきた。「椎名誠写真展 地球はまだまだおもしろい」、「中村征夫 水中の賢者たち」、「ナショナルジオグラフィック 揺さぶる魂・野生の叫び」、「中村征夫 熱帯夜」、それぞれが個性的な写真群である。展示だけでなく、ギャラリー内で女優・紺野美沙子トークショー、椎名誠トークショー、中国琵琶・中国笛コンサートなども行ってきた。

文化の風を吹かせたい

ブルーホールとなった古い酒蔵が建造された翌年（大正12年）に私の家が建てられた。これも小玉友吉時代である。この家は一昨年、国指定重要文化財となった。近代和風建築物として価値ある建物という評価をいただいた。母屋を取り囲む庭園、米蔵、車庫という配置は87年経った今でも訪れる者を惹きつけるものがあるようだ。潟上市飯田川飯塚にはこの重文指定の家の他に小玉家分家の建物群が残っている。

この家々は一本の通りに面して建ち並んでいて落ち着いた街並みを形作っている。ブルーホールを核にしてこの町を訪れる人々に建物群を散策して見て歩けるような整備ができないだろうかと考えている。私の曾祖父、小玉友吉は終生この地域の開発に心血を注いできた。産業の振興は友吉の命だったと思う。その残したものが地域の文化的開発になるとすれば、それも友吉の希求してきたものから外れるものではないであろう。

この地域の一陣の文化の風が大きな風になることを夢見ながら、この事業に取り組んでいきたい。